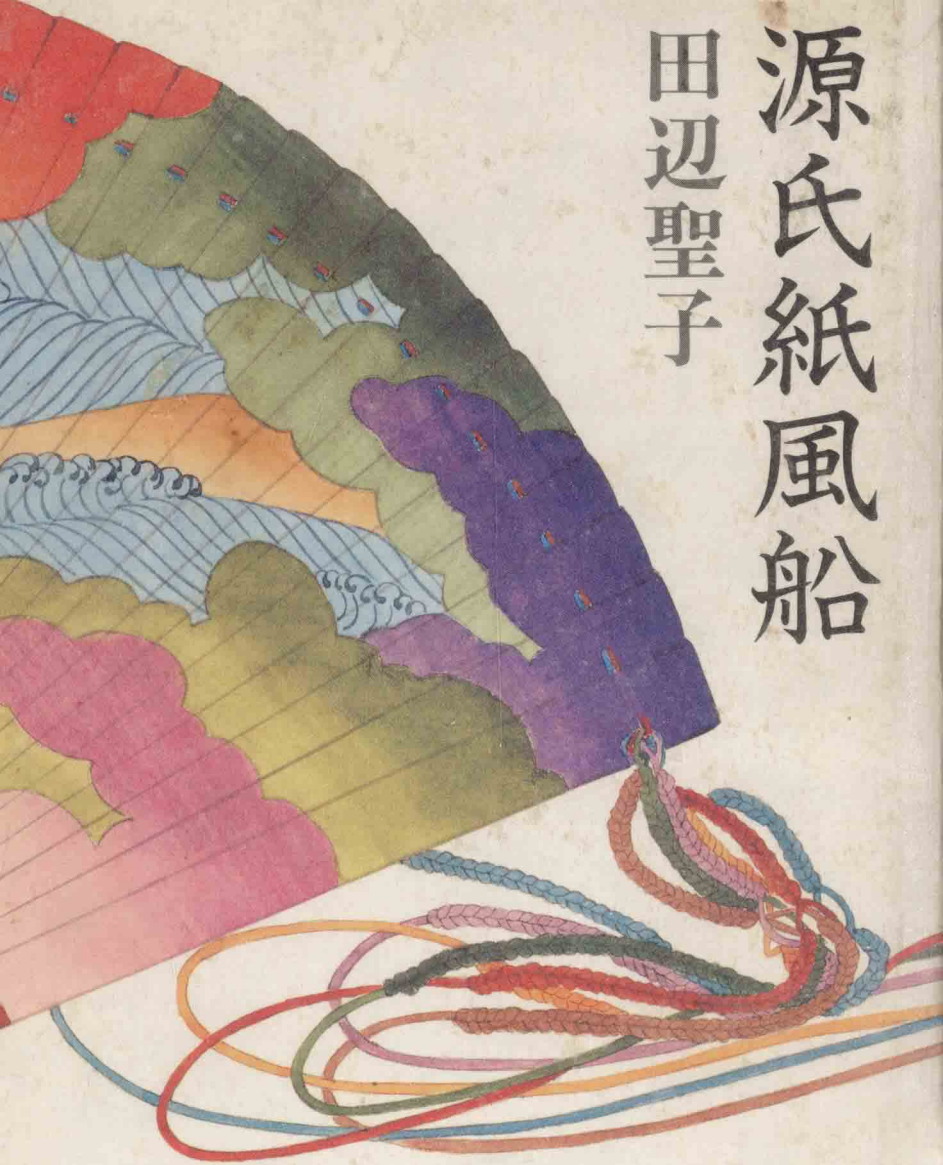
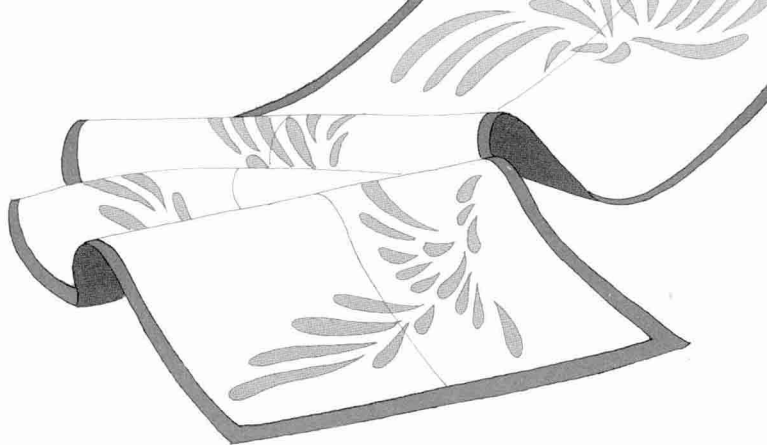


源氏紙風船

田辺聖子





源氏紙風船
田辺聖子

新潮社版

源氏紙風船

一九八一年一〇月一〇日 印刷
一九八一年一〇月一五日 発行

著者 田辺聖子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111

（編集部） 03—266—5411

振替東京四—八〇八

印刷 株式会社金羊社

製本 大口製本株式会社

定価 九〇〇円



© 1981, Seiko Tanabe
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

源氏紙風船*目次

「源氏」は面白い小説か？……………7

源氏という男……………29

女は布帛^{きれ}を愛す……………71

女は什器を愛す……………82

女はセレモニーを愛す……………94

紫の上という女……………105

埋める作業……………169

私の好きな文章……………197

紫式部という女……………219

装幀 岡田嘉夫

源氏紙風船

げんじ
かみ
ふう
せん

「源氏」は面白い小説か？

「源氏」は面白い小説か？

「新源氏物語」は、三年半、週刊誌に連載したものである。はじめ編集部としては、適当にダイジェストして、と考えていられたようであるが、「源氏」というのはダイジェストしにくい物語で、「宇治十帖」まで書かずに三年半もかかり、本にして五冊分にもなってしまった。

ダイジェストしにくい、といっても、かなりわかりやすい「小説」に仕立て上った、と私は自分で思い、知人に批評をもとめてみた。

この際、友人はことさら男性の知人をえらび、また職種はともかく、なるべく文学的識見（しきけん）を固執（しつこ）しないと思われる人をえらんだ。なぜ男性かというと、女性には「源氏好き」や「源氏狂い」が多い。「源氏酔い」というのもあり、「源氏」という言葉だけで酩酊（めいてい）状態になる人も少なくなく、女性ならたいはいの人は、「須磨（すま）」ぐらいまでは知っているものである。更によく知っている人は、「源氏」の女君たちの人物評論などを好むものである。

そこへくると男性は、入試用のテキストでしか知らない、という人が多いから、「源氏」については白紙の状態で接してくれるであろうと思われる。

また、文学に縁遠い生活の人をえらんだわけは、口語訳についての見識（偏見といってもよ

い)を持たないだろうという、私の心だのみのせいである。文学的見識のある人は、『源氏』は原文でよまなければ真の面白さは分らない」と固執される向きが多いのだ。それはむしろ、そこに違いないが、原文の精緻な文法に通曉するばかりでなく、当時の習俗、文物に肌なれし、作者のおびただしい教養の蓄積に見合う用意が、こちらになければならない。千年をへだてた読者としては、一般論として、かなりむりである。尤も、いちいち注釈を覗き、欄外の校注を頼り、うしろのページの解説にたすけられれば完読することも不可能ではないが、それをやっているとスピードがおちる。小説をよむ面白さよりも「学業成就の喜び」になってしまう。刻苦精勵してとりついていると、モーパッサンのいい草ではないが、私には、

「年をとってから、字を習おうとする老人の情熱」

といった情景が髣髴として、小説としてよむたのしみから遠くなる。(いや、原文をよんで「源氏」の面白さを知るといふのは、まことにうれしいことで、その恍惚の境地の万分の一は、私もうかがい知った気がするが、それは多くの口語訳で、原典のオリエンテーションを与えられたのちのことであつた)

小説「源氏」を小説として私は見て、いうのだが)をよむ楽しみの中にはスピードが大きな要素を占める。もし、現代の私たちも、かの「更級日記」の少女のように、息もつかせぬスピードで読めれば(つまりあの、「源氏の五十余巻、欄に入りながら」得た文学少女が、「得てかへる心地のうれしさぞ、いみじきや。はしるはしる、わづかに見つ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の中にうちふして引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともして、これを見るよりほかのことなければ……」という、あの陶醉と狂喜のスピードをわがものとできれば)どんなに楽しく

面白いことであろうと思われるが、現代ではその幸福は望めぬことで、我々は更級少女の昂奮（こうふん）をうらやましく想像するほか、ないのである。

それが口語訳であると、読むスピードが出て、「更級少女の楽しみ」の幾分かは自分のものとすることができる。それは幸わせではあるものの、そこに訳者に対する信頼がなければ、楽しみはかなり削減されるわけである。然（しか）り而（しか）うして、大抵の文学的識見（しきけん）を有する人は、他を信頼することなき自負家が多いから、

「原文でなければ面白くない」

と、口語訳をおとしめる、という段取りである。

ところで、そういう知人たちに聞いてみると、一人は（四十代後半。マスコミ関係勤務）、
「本はたしかに送ってもらいました、大きに。いま女房（よめばん）よんどりますワ。僕（わ）？——いや、読（よ）まな、いかん思うのやけど、中々、ヒマ無（な）うて。週刊誌に載（の）つてるときは、本になったら読（よ）も、思（おも）てたけど、本になったら、アンタ、五冊もあるねがな、ビックリしてもた。どっから手エつけてええやら分らへん」

もう一人の男は（五十代半ば。自営業）、

「読（よ）みました、有名なわりに、『源氏』ちゅうもんについて何も知らんよってね、いっぺん読（よ）んだかな、いかん思うて、全巻、よみました、ちゃんとていねいに五巻よみましたで」

面白かったか、と聞くと、

「そやなあ——。（しばし絶句）まあしかし、あら、オナゴのよむもんでっしゃろなあ。あんなもん、ほんまに千年もよみつがれたんでつか。千年のあいだ、オナゴだけよんでたん、ちがいますか、男（おとこ）はあんまり、おもしろくないなあ……」

という評であつた。私にはこの二つの評がたいそう象徴的に思える。更にもう一人、これも日頃、小説とか文学に関係ない生活を送っている中年男、(年齢は聞いていないが、尋常高等小学校一年生の国定教科書、国語読本は冒頭、「サイタサイタ サクラガサイタ」だった、といっているから、やはり昭和初年生れであろう) サラリーマンの男に「源氏」を読んでもらつて聞くと、彼はわりに粘着力のある男で、通勤のいき帰りに五冊を読んだ、といい、

「男が女々しいてねエ」

「男て、光源氏ですか？」

「そう。せんでもええこととして、あとで後悔する。わかつてることとして、あとでくしゃくしゃ考えて苦しむ。読んで、こつちまでくしゃくしゃする。——それから女も、そうすな。何や、幽霊に魔おそわれてヒキツケおこすのんおまつしやろ、夕顔、いいましたか、あれやら、朧月夜おぼろづよやら、いやもう、たより無うて、スカ尻おしりみたいで、自主性あらへん」

私はそうは思えないのだが、そういわれると、そんな氣もする。かつ、「源氏」を貶おとしめられると、私のことを悪くいわれた氣がする。

「そこへくるとあの、早口の娘が面白い、それから鼻の赤い、末摘花すえつひはながおもしろい、しかし、紫式部むらさきしきぶいうのは用捨もちやない人やねエ」

用捨ない、というのはどういうのを意味するのか、というと、醜貌しめうぼうとか迂愚うぐとかいいうものを手きびしく嘲笑ちやうしやうする、あるいは下人、大衆、などというものをバカにしてはばからない、という。そんなことを氣にしていたら王朝文学は読めない。

「それから、うんざりするぐらい着物の話ばかり出るのに、食うもんの話がない、そのへんも退屈します。やっぱり、女の書いたもんですな」

では全く、いいところがないかというと、たとえば長いこと紫の上と結婚して安定しているのに、女三の宮との縁談が持ち上ると、またぞろ興味を寄せるという男性心理、それから、「初音」の巻、このへんは冗長でだれるところだが、ふしぎにこの男性は面白いという。それもただ一個所、

「正月に、あちこちの女のところをまわって、夕方、明石^{あかし}の上のところに来ますな、明石の上は、手許から離れた子供の手紙が来たというので昂奮して目が輝いてる、それが魅力にみえて源氏は泊っていく。泊ったけれども、明方、すぐ帰るという、このへんが男の本性をまあよく捉まえて、面白かった印象がありますな」

そこは実は、私の口語訳に色がついているからかもしれない。尤も、そうはいつでも、決して原文の意と品を曲げたつもりは、自分ではないのであるが。

たとえば原文ではこうなっている。源氏が訪れてみると明石の上の御殿は優雅で、本人はいないが、手習いの反故^{はふこ}などとり散らしてあり、娘の手紙をうぐいすの初音によそえて喜ぶ歌が書き散らされてあつたりする。明石の上の生んだ姫君はこの正月、八歳、紫の上に引きとられているのである。源氏がほえみつつ、それらを見ているところへ、明石の上がにじり出てくる。

「るざり出でて、さすがにみづからのもてなしはかしこまりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりはことなりと思す。白きに、けざやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひてなつかしければ、新しき年の御騒がれもや、とつつましかれど、こなたにとまりたまひぬ。なほ、おぼえことなりかし、と、方々に心おきて思す。南の殿^{なんどの}には、ましてめざましがる人々あり。

まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかし、と思ふに、なごりもただな

らずあはれに思ふ」

この個所は、私は、

「……明石の上が、いざり出て来た。」

豪奢に住みなし、氣位たかい女であるが、明石の上は源氏に倣った態度はみせず、つつましく控え目であった。愛に狎れて無遠慮になつたりしない聡明さに、源氏はやはり心ひかれる。

源氏の贈り物の、唐綾の白い袷に、黒髪があざやかにかかつてゐる。裾がすこし薄くなつてゐるのもなまめかしかった。明石の上の瞳は、今日は輝いてゐた。小さい姫君の可愛らしい返事が、心の奥に灯をともしたように、つつましく氣位たかいこの女に、華やきを与えてゐた。

『年を重ねるにつれ、あなたは美しく魅力的になるね——思つたとおり、その白い唐綾は、あなたによく似合う。今夜はこちらに泊まるよ』

『……新年早々では、対の上はどう思ひ召すことやら……』

明石の上は源氏の腕の中で絶え絶えに答えたが、切れ長の瞳はつややかな情感にうるんだ。

源氏は、明石の上のもとで泊まるつもりで来たものではなかったが、艶な情趣に負けてしまうのも楽しかった。明石の上とのあいだが、そういう緊張した関係であるのも源氏には面白かった。

紫の上の不快を思わぬでもなかったけれど——。

それでもさすがに、まだ明けきらぬころ、南の対に帰つていった。明石の上は、こんなに早く帰らないでも……と、源氏の去つたあと、よけい物思ひが深まる氣がした」

という書き方をした。なんで長々と引用したかという、素人の「源氏よみ」に面白がられる個所、というのは、私の口語訳がかなり原典を曲げた舞文を弄してゐるのではないかと疑われる向きもあるからである。原文の前後を更にお読み頂くと、「明石の上の瞳は、今日は輝いてい

た」という挿入がべつに私の恣意的な修飾ではないことがお分り頂けると思う。その明石の上の華やきに源氏が魅力をおぼえ、予定外の行動として泊ってゆく、そのあたりが、

「男の心理、よう捉えとって」

面白い、とこの男性はいうのであって、これは私の口語訳が面白かった、ということではないのである。作者、紫式部の男性観察の一端が、千年をへだてたのちの男性読者の共感をよんだわけである。

しかし、そういう片々たる興味はあるものの、私が聞いたかぎりでは、全く白紙の状態で、「源氏物語」に生れてはじめて接した男性読者の印象としては、

1 とりとめなく膨大であつた。

2 ほんとにこんなものが、千年もの長い間、もてはやされ、よみつがれてきたのか？

3 オナゴのよむもの、もしくは玩弄するものではないか？

4 男がよんではあまり面白くなく、たまに面白いのは、男の心理（女性に対する）が描破されているところにすぎない。

5 登場人物の男は女々しく、女は頼りない。

6 食べ物の話はない、総じて下賤なる日常次元の話がない。

というような感想に集約されるらしい。これは私がことさら、文学に縁遠い日常生活者の意見ばかり徴したせいもあるが、現代人は要するに、「源氏物語」よりも「今昔物語」の世界の住人なのであろう。かの「今昔」の中にある、女盗人が手下を鞭うつ話や、蛇を捕えて刻んで焼き、魚と称して売りつける話、などをよませれば、いたく面白がるのかもしれない。

あるいは、ダイジェストしやすい「落窪物語」のようなもの、起承転結があつて「大団円」で

しめくくられる話、ドラマ的起伏の目鼻だちがはっきりしているものであれば喜ばれるのかもしれない。

しかし現代の小説はむしろ、ほとんど「今昔物語」風である。さすれば、現今はやりの小説などであれば、彼らの嗜好にかなうのであろうか？

そこで私は二、三のベストセラー小説を挙げてきいてみたら、彼らはその中のいくつかを読んでいて、格別に面白がってもしなかった。私は彼らを文学的識見を持たない人、という風に考えていたが、それがどうやら誤まりであるらしいこともわかった。彼らは文学的というより、人生的識見によってある作品は「文章が粗雑で好みに合わない」とか、ある作品は「紙芝居のようだ」とか形容した。結局、「男がよんでおもしろい」ものは、この世にはあんまりなく、もはや期待もせず、その渴望はもつと現実的な形のあるもので充たしている、そんな風であるらしい。たぶん「今昔物語」の中の登場人物自体、平安末期の実生活の中では「男がよんでおもしろい」というよみものに遭遇せず、生を終ったのかもしれない。

「源氏」は千年のあいだ、所詮、生活者としての男たちからは無縁に、女たちと知識階層のものとして生命をとどめたのであろうか？

ある知人の男性は夫婦そろってお茶を習い出し、半年になるが、彼はおよそお茶などというものに縁がなさそうな燕雑粗笨な人間である。

それがどういふ風にかしこまって茶席に並んでいるのかと、想像するだけでも私には興味あるが、彼にいわせると、

「おばはんが、やかましィにいいまッさかい」

ということ、むりやり細君に引っぱられたのであるらしい。それは私にはさながら、戦国時